Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

第16回 佐野隆治会長④

パスポートのいらない英国を創る

英語学習熱の高まりとともに、昭和40年代の終わりから急成長を遂げた神田外語学院では、「外国に行けない学生たちにも異文化の体験をさせたい」という信念のもと、語学研修施設の計画に乗り出しました。その想いは、福島県天栄村の高原でイギリスの環境を再現した「ブリティッシュヒルズ」として結実しますが、完成までの道のりは決して平坦ではありませんでした。かつてない研修施設を実現した佐野隆治会長に、ブリティッシュヒルズへの取り組みと異文化理解を深めることの意義についてお聞きしました。

神田外語学院は、外国人のネイティブ教員をどこよりも数多く採用して、生きた英語にふれる機会を提供していきました。昭和40年代半ばから昭和50年代にかけてです。その教育方針は社会にも認めていただいて、学生の数はうなぎ登りに増えていきましたね。

ただ、学校があるのは神田ですよ。校舎から一歩出れば、飲み屋街です。せっかく英語を覚えてもすぐにかき消されちゃう。それに外国語っていうのは、朝から晩まで使っていないとなかなか身に付かない。親父（初代理事長佐野公一氏）も学院長として現場を見ていたから、それは分かっていた。力を入れたのは語学留学です。カナダのバンクーバー、アメリカのアリゾナ、そしてイギリスへと提携する学校を増やしていきました。でも、すべての学生が留学できるわけじゃない。行けるのは全体の2割ぐらいだったかな。

留学できない学生たちにも、外国の環境で語学を学ばせてあげたい。そう思ったんです。そこで僕は、「バスでも行ける国内に、朝から晩まで英語に浸れるような合宿所を建てたい」と親父に言ったんです。外国の環境を創って、そこで寝泊まりしながら外国の文化と歴史を学べるような施設を創りたかった。親父は、「それはいい、ぜひ創りなさい」って言ってくれましたね。それが平成6（1994）年にオープンした「ブリティッシュヒルズ」の始まりです。

僕には当時からある考えがありました。中学、高校の修学旅行は絶対に変わると思っていたんです。東京など関東の学校であれば、奈良や京都に行きます。昔は、奈良・京都と言えば、一生に一度、行けるか行けないかという場所でした。でも、東海道新幹線が開通してずいぶんと近くなったし、テレビでもどんな様子かは見られるようになった。それに、仏教への関心も薄れてきている。クラス全員でわざわざ行くような時代はそろそろ終わるだろうな、と思っていたんです。（1/8）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第16回 佐野隆治会長④

パスポートのいらない英国を創る

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

外国語を学ぶ環境には文化が必要だから中世のイギリスの村を創れないかと考えた

京都・奈良への観光旅行の代わりに、外国の異文化体験ができるような研修施設があれば、修学旅行先として選んでもらえるんじゃないかと思ったんです。平日は学生が来る。週末は一般客が来る。まぁ、辺鄙な場所に創るだろうから、一般客が来るようになるには時間がかかるのは仕方がない。とにかく、うちの学生だけじゃなくて、いろんな学校から修学旅行が来るようになれば、経営的には軌道に乗せられるだろうと思っていたんです。

すぐに場所探しに取りかかりました。群馬や長野を中心に10カ所ぐらいは見たかな。条件のよい場所もありましたが狭いんです。3万坪ぐらいしかない。外国って、広いじゃないですか。広さの感覚、スケール感も大事なんです。そして、白河の土地に出会った。17万坪あったから、これならいいだろうと思いましたね。

白河の土地と出会ったのは、親父が死んだ翌年の昭和54（1979）年の春でした。それから2年間、様子を見ました。やはり、四季を通じてどんな様子かを見ないと決められない。そして、ここなら理想の施設を創れるだろうと。高原の上の土地で、奥は国有林だから大きな開発で新しい建物が視界に出来ることもない。施設へのアクセスは一本道だから防犯上も安心。うちの学校は女子学生が多いですからね。土地の一方は崖になっている。あそこを登るのは容易じゃない。それぐらい根性のある奴であれば入れてやろうと（笑）。女子大の寮みたいに塀と鉄条網では囲みたくなかったんです。

土地は決まった。次は建物です。僕は海外研修の引率で、アメリカもヨーロッパも行ってたけど、アメリカっていうのは、あまりいい建物はない。やっぱりヨーロッパのがいいと思って、建物を見るだけの旅行にも出かけました。イタリアからスイス、ドイツを抜けてオランダへ。そしてイギリスに渡りました。やっぱりイギリスでしたね。英語の発祥の地でもある。

外国語を学ぶ環境には文化が必要です。歴史のある建物がふさわしい。そこで、中世のイギリスの村を創れないかと考えたんです。荘園領主の邸宅である「マナーハウス」を中心に、村人が住む家々を建てていく。白河の土地なら、村ひとつぐらい創ることができますからね。（2/8）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第16回 佐野隆治会長④

パスポートのいらない英国を創る

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

怖かったのは、似て非なるものを作ってしまうことだから、建物の設計は本場の会社に依頼した

宿泊棟は8棟あるんですが、それぞれの時代設定と建築様式を変えました。すべて同じだと不自然なんです。というのは、歴史のある村なら、時代を追うごとに建物が建っていくでしょう。古い建物もあれば、新しい建物もある。そのほうが自然なんです。ひとつの時代の建築様式に揃えちゃうと、「わざわざ作りました」ってことになってしまうんです。

建物のイメージは決まった。そこで、日本の建設会社に連絡をして、スケッチを描かせたら、これが問題にならない。まるでダメ。やっぱり日本人にはできないんです。じゃあ、本場でやってもらおうということで、イギリスのボーダーオークという設計事務所にコンタクトした。マナーハウスや歴史的な建物、景観づくりを得意とする会社です。家具や内装に関してもアドバイスをしてくれる。これで設計はイギリス、施工は日本の会社という体制が整いました。

一番怖かったのは、「似て非なるもの」を作ってしまうことなんですよ。外国の映画で日本の家が出てくる場面があるじゃないですか。どこかおかしいでしょ。中国だか、韓国だか、日本だか分からない。西洋人には分からなくても、日本人には分かる。違和感がある。文化がきちんと理解されていないのは、嫌な感じを覚えるじゃないですか。イギリス人が見て違和感を覚えるようなものは創りたくなかったから、建築物の設計はイギリスの会社に依頼したんです。

工事が始まると、イギリスから大工さんたちが技術指導に来てくれましてね。やっぱり独特の技術が必要です。日本の大工さんたちは器用だからコツをつかんでしまえばあとは大丈夫。それにしても、職人同士というのは、言葉が通じなくてもいいんですね。大工さんは訛の強い英語を話すし、日本の職人は英語なんて分からない。それでも問題なくコミュニケーションして、仕事が進んでいく。それぞれ技とプライドがあるから通じ合える。ああ、これが本当の異文化コミュニケーションというものなんだなと思いましたよ。（3/8）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第16回 佐野隆治会長④

パスポートのいらない英国を創る

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

現地に行って、建築の内部や時代考証を研究した
費用を抑えるために家具や内装は自分たちで調達

瓦や窓枠といった建材はイギリスからの取り寄せです。宿泊棟の骨組みに使っている材木も現地で調達しました。オーク材といって、日本でいう樫（カシ）ですが、ちょっと違う。太さが1尺（約30センチ）もある樫の木なんて日本じゃ滅多にありませんからね。

オーク材の購入では、おもしろい話があるんですよ。うちがオーク材を調達していた時期にロンドンの劇場、グローブ座も建て替えていた。でも、あちらは完成が遅れたんです。すると、劇場の責任者は「日本にある神田外語という学校がオーク材を買い占めたのが原因だ」って言い出して、それがイギリスの新聞でも報道された。一流紙ですよ。そのニュースが日本にも伝わって、日本のマスコミもおもしろおかしく取り上げる始末です。

こちらはきちんと契約して、調達している。あまりにもいい加減だから、イギリスの新聞社にも抗議して、謝罪文も出させました。どうやら劇場と材木業者が何か都合の悪いことがあって、うちに責任を押しつけようとしたようです。でも、設計を依頼していた会社のトップが伯爵でね。彼は、新聞社にも顔が効いたから、きちんと謝罪するところまで詰めることができた。

マナーハウスの骨組みは鉄筋です。石で造ることも考えましたが、工期が倍になってしまいますからね。鉄筋でも2年かかりました。冬場は雪が積もって、屋外の作業ができないんです。石だと4年になってしまうから、さすがに予算が合いませんでした。でも、石で造りたかったなぁ。

建物を造っているときに、内装を決めていきました。もう一度、イギリスに行って、マナーハウスの内装をじっくりと見学した。ライブラリーを設ける予定だったので、ロンドンから2時間ほどの街に行って古書を仕入れた。建築の本もずいぶんと購入しました。建物の細部までスケッチしている本をたくさん見つけてね。イギリスには結構、そういう本が多いんですよ。内装の下準備も2年ぐらいはかかりましたね。

家具の買い付けや内装資材の手配はできるだけ自分たちでやりました。設計会社に頼むと、とんでもない請求が来る。伯爵様ですからね（笑）。（4/8）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第16回 佐野隆治会長④

パスポートのいらない英国を創る

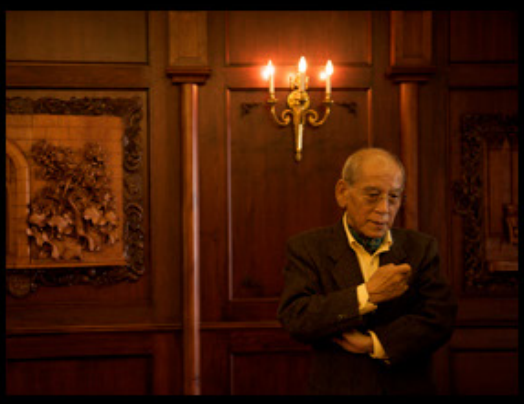
～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

「福島の研修所にあったのと同じじゃないか」と気楽になれば、外国語だって話せるようになる

昔、骨董の鑑定士をされている方の本を読んだことがありましてね。その方は、三井などの名家に出入りしている骨董屋に丁稚奉公に入った。小僧として、色んな手伝いをしているうちに、上等な骨董に触れる機会にも恵まれた。本の中で、その方は「本物は見た目では分からない。触ってみて、初めて分かる」とお書きになっていた。

我々が海外のお城なんかに行っても、ロープが張ってあって、「ここからは入らないでください」と言われる。触っちゃいけない。座っちゃいけない。でも、それだとテレビを観ているのと変わりないじゃないですか。

実際に100年前の椅子に座って、その時代の本を開いてみれば、日本との違い、文化の違いが分かるような気がするんです。特に、若い子たちにはそういうものを感じさせたい。日本人はどちらかと言うと、おしゃべりではない。外国に行って文化や環境が違うと萎縮して話せなくなっちゃう。でも、ブリティッシュヒルズで本物を体験しておけば、「なんだ、福島の研修所にあったのと同じじゃないか」と気楽になる。緊張が解ければ、話せるようになるんですよ。それが大切だと思って、とにかく本物にこだわったんですよ。



ただ、家具などの調度を揃えるのには本当に手間ひまかかりましたね。マナーハウスにしても、同じ時代の調度でなければならない。運良く、その時代のアンティークの建材に出会ったとしても、必要な数が揃わなければ意味がない。左右対称の空間でデザインの違う調度を使っていたら変ですからね。数が揃わなければ、結局作らせるしかない。資料を見ながら、ここにはこれがあるべきだ、ここにはこれが必要だと議論しながら、イギリスの会社に発注していきました。

そんな作業を続けていると、さすがに文化も理解できるんですよ。マナーハウスには中国風の大きな器も置いてある。当時、イギリスは中国との交易があったから、上流階級の家にはそういう異国趣味の品々があった。2階に上がったところの絨毯も同じように中東との交易の証です。絨毯は中東の風土に適しているんです。日本と違って砂地ですから、絨毯が靴の裏の砂が入り込んでも、砂は叩けば落ちる。そんなことも学びましたね。（5/8）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第16回 佐野隆治会長④

パスポートのいらない英国を創る

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

ずっと本物にこだわってきたから、英国大使にも ここには我が国の文化がある、と言っていただける

マナーハウスを建てるのであれば、紋章（エムブレム）がなければならない。武士の紋所と同じですね。中央にあるのは、学びという炎によって進むべき道を照らすトーチ（灯火）です。楯には、「RS」は僕の名前、Ryuji Sano のイニシャル、青と赤の佐野学園のシンボル、オークの木、そして学びの象徴である本が描かれています。楯を支えるのは純血と正義の象徴、一角獣です。“PAX PER LINGVAM”は、建学の理念「言葉は世界をつなぐ平和の礎」のラテン語です。佐野学園、ブリティッシュヒルズの理念が凝縮されているのです。

平成6（1994）年7月、国際語学研修センター「ブリティッシュヒルズ」がオープンしました。同時に川田雄基さんが館長に就任してくれました。川田さんは、イギリスと縁がある家系にお生まれになり、文化や歴史に関する造詣がものすごく深かった。その川田さんが三菱商事を辞めて、来てくれた。文化を創り、伝えていくのは、命がけの仕事です。川田さんなら、命をかけて、本気でやってくれる。いやぁ、本当にタイミングがよかったね。（※1）

川田館長はイギリスの伝統と文化に基づいて、提案をしてくれましたね。マナーハウスの2階の長い廊下には、壁に何も掛かっていなかった。川田館長に相談すると、「本来、廊下には先祖代々の肖像画を飾るものです。お父様の肖像をかけてみてはいかがでしょう」なんて言う。「よせやい」と僕が言うと、「では、イギリスと日本の交流で尽力された方々の肖像をかけましょう」と提案してくれたんです。それが、ポートレイトギャラリーです。

食事をするリフェクトリーには、旗がずらりと掲げられています。オーク材を提供してくれた村々の村旗です。小さな村の旗なんて調べようがない。ベッキーというイギリス人の先生がいましてね。彼女が調べてくれたんです。

オープンしてからもそうやって本物を作ってきた。最初は本物のバトラー（執事）までいたんですから。本物にこだわってきたから、アンバサダーズ・カップでイギリス大使がいらっしゃっても、「ここには我が国の文化がある」とおっしゃっていただける。その言葉が本物であることの証でしょうね。（6/8）

1. 本サイトの第6回で『本物の英国があることに誇りを持つ』に掲載。

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第16回 佐野隆治会長④

パスポートのいらない英国を創る

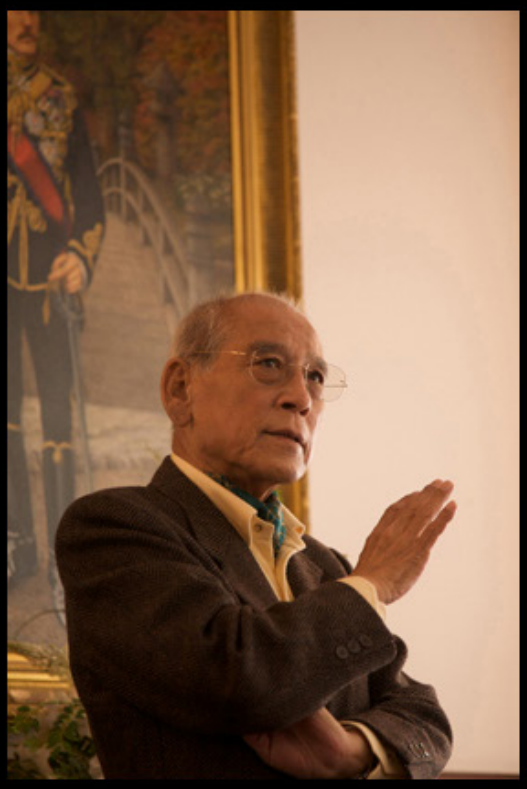
～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

リゾートと研修施設の融合はちょっと早すぎた
何をやるにしても、時代の先を行きすぎるんです

ブリティッシュヒルズのコンセプトは、「リゾートインスティテュート」です。研修所とリゾートを融合して、教育とホスピタリティの両方を提供する。アメリカに、国際会議を行うスキー場があります。スキーと国際会議が一緒になるなんてイメージできませんよね。でも実際にそういう施設がある。ならば、研修所とリゾートもありだろうと、「リゾートインスティテュート」で行くことに決めました。

ただ、日本人はどうしても分けたがります。リゾートはリゾート。研修所は研修所。色んな方から、「ここはホテルですか、それとも研修所ですか？」とよく聞かれました。職員たちも分からない。「どうやって説明すればいいんですか」と言われましたね。今でこそ、まったく違う分野の事業やサービスを融合するのは当たり前になりましたが、当時は早すぎたんです。ほんと、何の事業をやるにしても、時代の先を行きすぎるんです（笑）。

オープンからの10年間は、経営的には厳しかったですね。すでにお話した通り、ブリティッシュヒルズは、修学旅行の利用も見込んでいました。結果的には、教育研修旅行が集客の柱になっていきますが、それには時間がかかった。こういった施設は、いくら口で説明しても分かるものじゃありません。



でも、学校の先生に一度使ってもらえれば、翌年も来てくれる場合が多いし、その先生が転勤すれば新しい学校でブリティッシュヒルズへの旅行を提案してくれる。それが一番の宣伝なんです。ただ、それには時間がかかった。その時間は読みきれませんでしたね。

経営が軌道に乗るまで個人資産をつぎこんだから、もう、自分の財産なんてありませんよ。まぁ、死んでも棺桶にはお金は持っていけませんからね。宿泊棟は樹齢数百年のオーク材を使っているから、同じ歳月だけ保つし、マナーハウスは鉄筋だけど、100年ぐらいは大丈夫でしょう。こういった施設があって、若い連中が本気で使ってくれれば、そのほうが財産を残すよりもいいと思いますね。（7/8）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第16回 佐野隆治会長④

パスポートのいらない英国を創る

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

文化の蓄積は、豊潤なかたちとなりいつか華開き、その価値が西に戻ったとき世界に平和が訪れる

僕は、日本人に外国の文化をもっと理解できるようになってほしいと思っているんですよ。それも見た目で判断するんじゃなくて、精神性まで踏み込んで理解できるようになってほしい。そのために、ブリティッシュヒルズを創った。文化の大切さを啓蒙していきたいけれど、ただ知識を教え込むんじゃなくて、体験することで自然に感じて、学べる場所を提供したかったんです。

ブリティッシュヒルズのスタッフには本物の文化を創ってほしい。本気で勉強して、本物を理解して、本物がなんであるかを自分の言葉で説明できるようになってほしい。僕の時代じゃあ無理なんだろうけど、次の世代が本気になって人づくりをしていけばきっとできる。そして、文化的な集団をブリティッシュヒルズに創っていく。そういう意欲を持ってほしい。

日本人は、文化的にもしっかりしているし、人間が優しくて、プライドもある。色んな国の文化や習慣を自然に受け入れて、消化してしまう。そんなすごい人種、ほかにはいませんよ。僕は日本人が目覚めて、本気になることに期待している。長い歴史の中で、ヨーロッパから中東、中国、韓国を伝わって、日本にさまざまな文化がやってきた。その文化は日本に蓄積していった。日本の先は海だから伝えようがない。日本人の価値観には、すでに世界の文化が入っているんです。だから、日本人が本当に目覚めれば、世界の文化や宗教を受け止めて、独自の哲学を創れるはずです。

文化の蓄積は、豊潤なかたちとなって、いつか華開くでしょう。その価値がふたたび西へ西へと戻っていったとき、世界に平和が訪れるんじゃないかな。平和な世界の「種」を創れるのは日本人だと思いますよ。（8/8）

佐野隆治（さのりゅうじ）
昭和9（1934）年東京生まれ。慶應義塾大学法学部中退。昭和38（1963）年、神田外語学院の前身であるセントラル米英語学院の経営に参画、以来、神田外語グループの発展において中心的な役割を果たす。昭和63（1988）年に学校法人佐野学園の第3代理事長に就任。平成22（2010）年、会長に就任する。平成29（2017）年3月永眠。享年82歳。